

思いやりの心をもつ子どもの育成

—日常的な活動の工夫と多様な教材を活用した道徳授業を通して—

教職実践基礎領域

吉田 光宏

はじめに

近年、子どもの自殺、いじめなどの今日的教育課題が耐えず報道され、児童生徒が他者に対して、思いやりの心をもち日常生活を豊かに送っているか疑問である。

文部科学省(2008)によると、「現在、日本の若者・子どもたちには、他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、生命尊重・人権尊重の心、正義感、基本的な生活習慣の乱れ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下などの傾向がある、社会を混乱させるような、少年が関与する事件の報道に触れ、子どもたちの規範意識について不安を感じる人も多い。」と述べられている。

また、道徳教育について文部科学省は、平成27年3月に道徳教育の抜本的改善・充実の中で以下の3つの道徳の時間の課題例を提示している。1つ目は、「道徳の時間」は、各教科等に比べて軽視されがちであることである。2つ目は、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導であることである。3つ目は、発達段階などを十分に踏まえ、子ども生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりすることである。週一時間の道徳で児童の心に響かせる多様な教材を活用した実践を行うことが必要であると考えられる。

現在、小・中学校の道徳教育では、読み物教材を中心とした授業が実践されている。その実践の流れとして、読み物の登場人物の気持ちを考えさせ、実生活に結びつける展開になっている。その成果が十分に出ているとは、言えないようである。このことを踏まえ、道徳の授業の中から道徳的实践力が育まれ、道徳的实践に活かされていないと実感している。

愛知県公立小学校の1年半のサポーター校と教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで道徳の授業実践を行い、子どもが思いやりの心を育み、道徳的实践につながるようにしていきたいと思い、実践に取り組んできた。

I 主題設定の理由

1 主題の設定

現在の日本では、家庭や地域社会の教育機能の低下が懸念されている。思いやりや譲り合いの精神は、本来家庭や地域で育まれてきた。しかし、今日の家庭に

おいては、社会背景の変化により少子化や核家族化が進み、兄弟姉妹間の関わり合いの減少、親による過保護の傾向、我が子への過度な期待などが子どもたちの基本的な生活習慣の確立、自制心や規範意識の醸成、生活の自立や社会的自立に向けての成長を妨げる要因にもなっている。

また、サポーター校での子どもを観察すると、友だちに対して言葉や行動で傷つけてしまう場面や係り活動や当番活動をやらず、自分勝手な行動をする子どもを目にする。そのため、友だちのことを思い行動することができていないように感じる。

2 思いやりの心を育むとは

押谷・立石(1991)は、学年段階ごとの指導の重点について以下のように述べている。

学年	学年段階ごとの指導の重点
低学年	低学年の子どもたちは、まだ相手の立場に立って物事を考えることは、十分にできないと言われている。子どもたちは、相手を自分に置き換え、自分の立場から相手に対して様々な行為をしていく。つまり、この段階では、本当の意味の思いやりのある行為をすることが難しいが、様々な体験や活動を通して、自分がしてほしいと思う行為を相手に対して行うことはできる。
中学年	中学年になると、徐々に相手の立場に立って物事を考えることができるようになる。そのことは、本来の意味における <u>思いやりについての指導がこの時期、十分なされなければならない</u> ことを意味している。 ※太文字、波線は追加記入
高学年	認識能力や社会的経験の発達が著しいこの時期においては、一層の深まりと広がりをもって他者理解がなされることになる。思いやりの心を育成する指導も、他者理解の発達に合わせて様々な立場に対して、同様に思いやりの心がもてるような指導を充実させることが大切である。

以上の太文字波線のように、中学年は、他者につい

て考えることができるようになる時期であるため、思いやりの心を十分に育成しなければいけない。

また、押谷(1991)は、次のように提言している。

「思いやりの心をもつためには、他者理解が必要不可欠である。他者に対する理解が相手の立場に立ってなされることによって、双方における思いやりのある行為が可能になる。」
 「思いやりの心を深めていくには、他者理解において人のよさを見つけることである。」

他者理解を深めることで思いやりの心を育み、子どもが過ごす学校生活を豊かにしていきたいと強く思う。

思いやりの心をもつ子どもの姿を「相手のことを考え行動することができる」と定義し、上記の内容をもとに主題の設定として設定した。

3 副題の設定

文部科学省(2008)は、

学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

と述べている。道徳の時間だけではなく、教育活動全体を通して、指導を行うことが必要である。そこで、日常的な活動の工夫を本研究の手立てに取り入れる。

また、佐藤幸治(1999)は、

道徳の時間を充実させるためには、魅力的な教材の選定・開発が不可欠である。

と述べている。学習指導要領(2008)は、道徳の時間において、子どもが道徳的価値の自覚を深めるとともに、そのことを通して自己の生き方についての考えを一層深めることができるように、これらの要件を備えた多様な教材の開発と活用を期待しており、「教材が多様に開発されることを通して、その生かし方もより創意あるものになり、子ども自身の主体的な活用が促される。」とも述べられている。以上のことから、多様な教材開発と活用の重要性を感じる。

さらに、サポーター校では、副読本を中心に扱い、読み物資料に出てくる登場人物の心情を追いながら、自分自身と照らし合わせる道徳の授業が展開されている。授業後、子どもの様子を観察したが、習得したことを行動に移す姿は、確認できなかった。このような授業では、習得したことを行動に移すことが難しいと感じた。

つまり、道徳の授業において多様な教材を活用することは、子どもに多様な思考を促すことであると考え、その有効性を実証し、子どもの道徳的実践力を育むことを目指し、本研究の副題として設定した。

II 研究の構造

1 教師力向上実習の計画

実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して、思いやりの心を育むことができるかを考えていく。実習Ⅰでは、思いやりの理解に迫る。思いやりを育むためには、まず思いやりとは何かを考えさせないといけない。そのために、あらゆる場面で思いやりがあることを子どもに考えさせる。実習Ⅱでは、子どもの行動に着目する。実習Ⅰで行った思いやりの視点を行動に移すため、子どもの心に響く道徳授業を展開する。そのためには、身近な問題を意識させ、学校生活の写真を提示し、今後の学校生活の過ごし方を考えさせる。そして、行動に移すことを目指す。実習Ⅲでは、実習Ⅱで行った自作で教材開発した授業実践を他校で行い、行動の変化を検証する。

教師力向上実習	授業		思いやりの視点
実習Ⅰ	第1時	心と心のあく手	見知らぬ人 老人
	第2時	ブラッドレーの請求書	家族
	第3時	同じ仲間だから	友だち

教師力向上実習	授業		素材
実習Ⅱ	第1時	気持ちをカタチに	広告
	第2時	思いやり算	広告
	第3時	笑顔になる言葉かけ	広告
実習Ⅲ	第1時	思いやり算	広告

2 研究の仮説

- ①日常的な活動で、連続的な手立てを行うことによって、意識的に道徳的実践を行おうとするだろう。
- ②多様な教材を用いて道徳の授業実践をすることで、子どもはより身近な問題として考え、思いやりの心を育むことができるだろう
- ③思いやりの行動をしている子どもの姿を視覚的に提示することによって子どもは思いやりの心を育むことができるだろう。

3 研究の手立て

本研究では、日常的な活動と道徳の授業の2つの場面に分けて手立てを工夫した。

(1) 日常的な活動の工夫

〈手立て1〉

他者理解を深める活動

先ほど述べたように、他者理解によって、思いやりの心が育まれることは、押谷によって述べられている。

他者理解をするための有効な手立てとして、愛知県の副読本に掲載されている思いやりの木の実践を取り入れる。

副読本の思いやりの木では、思いやりのある行動に触れたときに、その行動を葉の形のカードに書いて張ることとなっており、自主的な活動として考えられているため、クラス全員が参加していないと考えられる。

そこで、思いやりの木の実践の工夫として、日直の仕事の一部として、取り入れる。副読本には、帰りの会に記入と書いて、振り返ると書かれている。しかし、本実践においては、朝の会に振り返ることで、今日も一日思いやりを見つけようとする意欲をつけさせることができると考えられる。

日常的に行うことが子どもの行動につながると考えられる。また、それに付け加え、学級通信で紹介することで、意識を無意識化できると考えられる。

学級通信による他者理解の深化

学級通信を定期的に発行する。主な内容は、子どもが思いやりの行動している姿である。学級通信を発行することに2つの良さがあると考えられる。1つ目は、教師が子どもの思いやりの姿を視覚化することで、子どもの具体的な姿を認識できることである。2つ目は、子どもが家庭に学級通信を持ち帰ることによって、家庭でも保護者とともに思いやりについて考えるための話題を提供できることである。

(1) 道徳の授業

〈手立て2〉

多様な教材の活用

多様な教材を活用した道徳の授業実践を行うことで、主体的な道徳的实践につながると考える。

多様な教材の具体例は、新聞、広告、ポスター、絵本、名言、伝記、映像などがある。なお、鈴木(2008)は、「広告は、キャッチコピーが優れている。練り上げた言葉だけに、授業構成を工夫すれば、子どもたちの脳裏に深く刻まれる」と述べている。これらは、文部科学省(2008)、鈴木(2008)、佐藤(2009)などの著書や資料を参考にした。

私の実践では、副読本の読み物資料が出てくる。私は、本実践において副読本も多様な教材の1つと考えているため、実践に取り入れた。

〈手立て3〉

考えさせる授業

鈴木(2008)は、考えさせる授業の工夫として以下の3点を挙げている。

- ① 資料提示の工夫
- ② 小刻みなノート作業
- ③ 考えを明確にする発問

以上の3点を授業に取り入れることで子どもの思考を促し全員参加をさせることができる。そうすることで、クラス全体が1時間の道徳で常に問題意識を考えることができ、日常で出会った問題に対しても考えて対応することができるだろう。

〈手立て4〉

出会いの演出

出会いの演出について鈴木(2008)は、「授業を構成する最大の技法は、ねらいとする内容と出会いをどのように演出するか」と述べている。この出会いについて、3つ述べられている。

- ① ズレを感じさせる出会い
- ② 意表をつく出会い
- ③ 比較して深まりのある出会い

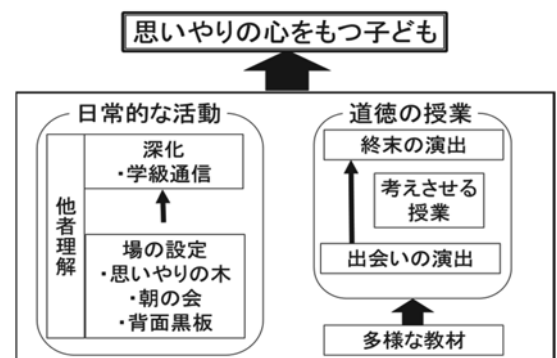
以上の3つの出会いを教材と組み合わせることによって、意欲的に子どもが授業に参加し、主体的に資料について考え、より授業に集中することができる。

〈手立て5〉

終末の演出

思いやりのある言動している子どもの姿を授業の終末で提示する。提示することで、資料で学んだ内容と子どもの思いやりのある言動がつながる。子どもは、具体的な姿から模倣したいという憧れの気持ちをもつことができ、この憧れの気持ちが行動へとつながるのではないかと考える。

4 研究構造図



5 検証方法

- 実習前後に行った子ども対象アンケート
- 授業で用いた子どものワークシート
- 授業前後の子どもの行動記録
- 学校環境適応感尺度「アセス」

Ⅲ 指導の実際

1 教師力向上実習Ⅰ

(1) 担当学級

担当学級：4年1組

子ども数：男子17名/女子21名/計38名

(2) 子どもの実態

子どもの様子

本学級の子どもは、男女共に隔てなく、外で仲良く遊んでおり、授業中も積極的に発言する子どもが多い。

一方で、友だちが困っていることに気づいているが気づいていないふりをする子どもや助けようとしないう子ども、自分勝手に行動する子どもも多くみられる。また、給食時間では、自分のことだけを考えお代わりをしてしまう子どもがいる。当番や係活動に関しては、仕事を友だちに任せることが目立つ。その子どもの行動から、自ら主体的に行動にすることができていないように感じた。

以上の実態から、友だちのよさ見つけを行うことにした。道徳の授業実践では、相手の立場に立って考えることができるような教材の活用を行うこととした。

(3) 日常的な活動の工夫

【手立て①他者理解】

「思いやりの木」の実践

押谷は、「相手に対して、客観的な事実を理解するのではなく、その根底に他者も自分と同様、人間としての悩み、苦しみ、喜びをもって存在として把握することが大切である。そのような把握ができると、他者理解が共感的に行われ、思いやりの心が育成されていく。思いやりの心を深めていくには、他者理解においてよさを見つけていくことが大切である。相手のよさを見つければ、そのことを自分も学び身に付けたいという意欲がわいてくる。」と述べている。

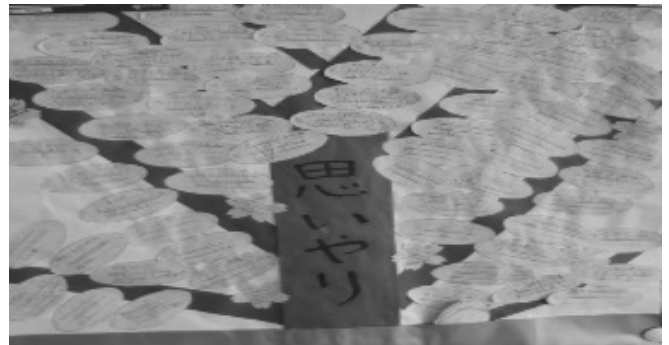
以上のことを踏まえ、「思いやりの木」の実践において、相手の思いやりの言動を見つけることで、人間関係を密にすることとなり、思いやりの心が育まれると考える。

「思いやりの木」を始める前に、意欲づけを行った。それは、実習開始時の朝の会で「思いやりの木の種を教室に埋めました。」ということ子どもに伝え、「思いやりを見つけることで、木がどんどん成長していきます。みんなで先生と一緒に木を育てていきましょう。」と話した。

以下の方法で、「思いやりの木」の実践を行った。

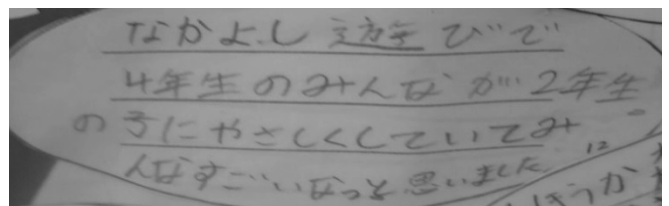
- ①児童が放課や帰りの会の時間に思いやりの葉に友だちの良さを記入する。
- ②教師が朝の会で紹介し、お互いの良さに気づかせる。
- ③子どもたちが常に、目にすることができるようにする。

実習Ⅰの期間内に、クラス全員が「思いやりの木」に参加できるようにする。その方法として、日直の仕事に、友だちの思いやり見つけを取り入れる。日直は、友だちの一日の言動を観察し、思いやりの言動を思いやりの葉(緑色)に放課や帰りの会などで時間を見つけ記入する。そこで、記入したものは、朝の会で教師が紹介する。その後、思いやりの木に葉っぱを掲示していく。また、日直以外でも思いやりの言動があった場合でも記入できるよう教室に思いやりの葉(黄色)を準備しておく。教師は、子どもにどんなことが思いやりなのかを確認させるために、見つけた思いやりの言動を思いやりの花に記入し、掲示する。



【成果】

下記の思いやりの葉の記述から、この子どもは、すごい褒めており、素直に受け止めることができるようになっている。



実習後、思いやりの木に関する記述式のアンケートを行った。

アンケート項目

「思いやりの木から日常生活で何か変わったことはありますか。」

このアンケートから思いやりの木によって友だちの良さを見つけ、他者理解を深めることができたかを検証したところ以下のような記述がみられた。

⑤思いやりの木から日常生活で、何か変わったことはありますか？

思いやりの木がない時は、思いやりがなめたけど、思いやりの木をやるから思いやりが1つはあおになつた。

思いやりの木を実践することで、友だちの思いやりの言動を意識することができた。記述から、友だちの思いやりを見つけることができるようになったとわかるのではないかな。

⑤思いやりの木から日常生活で、何か変わったことはありますか？

思いやり木が終われ、思いやりを見つけることができるようになった。書けよよかったなと思ひました。

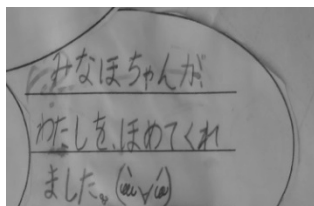
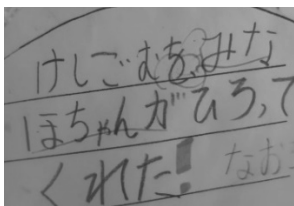
この子どもの記述からは、「思いやりの木」が終わっても、思いやりを見つけることができたことから、実践後の生活においても意欲的に他者理解ができるようになったと考えられる。

【課題】

書く内容がパターン化

実習の4週目には、多くの児童が思いやりの葉を書く姿を見ることができた。子どもの中には、1日に10枚を超えるほどの思いやりの葉を書く子どもがいた。しかし、子どもの発言から以下のような言葉があった。

C1：先生、今日は5枚書いたよ。



この発言をした子どもは、笑顔で私に向かって声をかけてきた。その際に私は、「よく、頑張ったね。すごいね。」と褒めた。それによって、その後も教師に向かって毎日何枚書いたかを報告してくる様子が見られた。この子どもは、教師に思いやりの葉をたくさん書くことを褒められたため、たくさん書くことが正しいことだと認識してしまったのである。

このことを踏まえると、教師が子どもに「思いやりの木」を行う意義を理解させていないことや子どもに対する声かけが課題であると考えられる。声かけに関しては、子どもの活動を褒めた後に、「この内容は、思いやりになるのか。」を問い、考えさせる必要があった。

また上記のような子どもは、この子どもだけではなかったため、朝の会でクラス全体に呼びかける必要があったと考える。

特定の子どもを取り上げて書く

「思いやりの木」の実践により日常生活で何か変わった子どもは、38人中32名が他者理解に関する記

述をしていたが残りの6名は、記述なしや「なし。」といった回答であった。

その原因として、日直の仕事の一部として「思いやりの葉」の記入を設定したことが挙げられる。そのため、子どもが受け身になってしまった。主体的にさせるには、学活や道徳の時間を活用し、思いやりの木を行うことの必要性を実感させることが必要であった。

また、親しい友だちのことばかりを書く子どもがおり、閉鎖的な活動になってしまった。

このことを踏まえると、様々な思いやりを見つけようとする助言が必要であった。

(4)多様な教材を活用した実践

第2時 (ブラッドレーの請求書)

子どもに思いやりの視点を考えさせるため、家族への思いやりを考えさせる素材を活用した。

素材：ブラッドレーの請求書(副読本)

ねらい：お手伝いについて考えさせ、家族への思いやりを育てる。

【手立て②多様な教材の活用】

本実践では、副読本「私たちの道徳」の中にある「ブラッドレーの請求書」を活用した。この教材は、家族への思いやりを考えさせるために、有効だと考え教材選択をした。

【手立て③考えさせる授業】

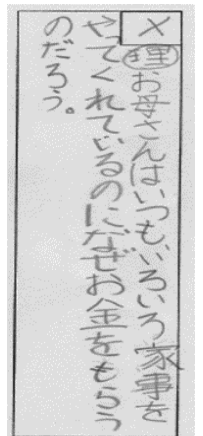
明確な発問として以下の発問を考えた。

「ブラッドレーの行いについてどう思いますか。○か×を考えて四角に記入してください。また、その理由を隣に書いてください。」

○か×かを決めさせて、理由を書かせることで、子どもが発問に対して考えやすくなる。

【成果】

この明確な発問により、全員がブラッドレーの行いについて考えることができたと考えられる。右のワークシートをみると、クラス全員が○か×を記述しており、理由も書かれていた。明確な発問以外の場所と比較すると明確な発問の場合、空欄が全く無かった。そのため、明確な発問により、問題について子どもが考えることができたと考えられる。



実習後、道徳の授業に関する記述式のアンケートを行い、思いやりを深めることができたかを検証した。

アンケート項目

「道徳の授業からなにか日常で変わったことがありますか。」

の質問に関して以下の記述があった。

④道徳の授業から日常生活で、何か変わったことはありますか？

お母さんのお手伝いをいっぱい
できるようになった。

この記述から、道徳的実践力を高めることができたことにより、行動に移すことが表れるようになった。また、以下の終末の発問によって道徳的実践に繋げることができた。家族への思いやりを込めた言葉を想定し、この発問を設定した。

「みなさんは、これからどんな気持ちで家のお手伝いをしたいですか」

この発問により、ワークシートより以下の記述がみられた。

C2：お母さんに少しでもやることをへらしてあげたい。

C3：これから、お手伝いします。

以上のことを踏まえ、家族への思いやりについて行動する意欲づけができたのではないかと考察できる。

【課題】

子どもが考え続ける発問

【手立て③】を行った後のワークシートの記述をみると、一言で書かれていることが多かった。このことから、これ以降の発問を分析すると、気持ちを考えさせる発問が続いてしまった。発問では、心情に偏りすぎず、子どもが考え続ける明確な発問が重要だということを学ぶことができた。

2 教師力向上実習Ⅱ

(1) 担当学級4年1組

子ども数：男子17名/女子21名/計38名

(2) 授業実践

第1時(気持ちをカタチに)

AC ジャパンの広告である「気持ちをカタチに」を取り扱い、鈴木の追試実践を行った。

素材：AC ジャパン広告「気持ちをカタチに」

ねらい：心の中で思っているだけでは、何も伝わらないことに気づかせ、思いやりの気持ちを行動で示そうとする意欲を高める。

【手立て②多様な教材】

本実践では、AC ジャパン広告「気持ちをカタチ」を取り扱い、授業実践を行った。

【手立て③考えさせる授業】

鈴木は、出会いの演出で子どもに広告を提示し、女子高生の気持ちについての明確な発問を設定している。

『この2人の女の子は、赤ちゃんを抱っこしているお母さんのことを気にしていると思いますか。「気にしていると思っている」とおもったら○、「そうとは言えない」と思ったら×を書いてください。』

私も同様に、上記のような明確な発問を子どもに行い、子どもの明確な判断をさせた。その後、考えをもとに理由を書かせた。

【手立て④出会いの演出】

広告の一部分を見せて、考えさせる。次に、広告を徐々に見せていくことで、意表をつく出会いを演出した。また、「思い」と「思いやり」、「心」と「心づかい」の言葉の比較をさせ、深まりのある出会いをさせた。

【手立て⑤終末の演出】

本時では、「気持ちをカタチに」の広告内にある言葉「思いは見えなくても、思いやりは誰にでも見える」ということを、子どもの学校生活に関わった思いやりを撮影し、終末に提示した。

左の写真は、給食時の写真である。この子どもは、主体的に飛び出していた給食のごみを片付ける行動を行っていた。右の写真では、掃除道具が片付けられていなかったため、気づいた子どもが片付けを行っていた。



【成果】

実習後のアンケート結果より「気持ちをカタチに」が今までの道徳の中で一番心に残ったと回答している一部の子どものから以下の記述が見られた。

C4：お年寄りに席を譲った。

C5：スーパー何か困っている人がいたら声をかけた。

C6：家でも弟が怪我したら助けた。

C7：家のお手伝いをした。

C8：図書館の本を整えた。

実習Ⅰで行った思いやりの視点についての内容が含まれており、道徳の授業から行動に移すことができたのではないだろうか。

C4、C5 から、実習Ⅰで行った実践「心と心のあく手」で学んだ見知らぬ人や老人への思いやりが活かされ、行動に移すことできたと考えられる。C6、C7 か

らは、「ブラッドレーの請求書」で考えた家族への思いやりが育まれ、行動に移すことができ、この実践に関係してきたのではないかと考えられる。

また、C8は、図書館を利用する子どものことを思いやり、行動したと考えられる。これは、授業の展開にある出会いの演出と授業のねらいに即した子どもの姿となる写真を授業の終末に見せたことが影響しているのではないかと考えられる。

【課題】

間の取り方

C9：思いやりは、大切です。

C10：思いやりっていいなと思いました。

上記の記述が授業の感想にあった。この記述により、子どもには、思いやりのよさを学ぶことしかできなかったのではないかと考える。また、今回、初めて読み物資料ではない、AC ジャパンの広告を活用した。

読み物資料とは違い、出会いを演出する実践のため、間の取り方が重要だったと考える。私は、子どもの意見をあまり拾うことができていなかった。そして、沈黙が続いたこともあり、慌てて資料提示をしてしまった。その結果、子どもは、「いいお話だ。」で終わったのではないかと考察する。

他の教育活動と関係づける

上記の記述から、ねらいに即した感想が出ていないことから、鈴木(2014)が述べるように、授業後にさらに1時間設定し、グループごとに、「気持ちをカタチにする場面」の写真を撮らせて、プレゼンさせることやその写真を学級掲示にすることで日常的に意識を高められる。この実践を取り上げた方がより子どもの思いやりの心を育めたのではないだろうか。

第2時(思いやり算)

本実践では、AC ジャパンの広告を活用し、教材開発した実践を行った。

素材：AC ジャパン広告「思いやり算」

ねらい：思いやりのある場面を考えさせたいうえで、日常生活を振り返り、相手を思いやる言動を高める。

【手立て②多様な教材】

本実践では、AC ジャパン広告「思いやり算」を取り扱い、授業実践を行った。

【手立て③考えさせる活動】

「本時では、導入時に思いやり算の広告に出てくる「助け合う、引き受ける、声をかける、分け合う」の4つの思いやり資料を提示し、資料からどのような意味があるかを考えさせた。また、資料提示後に気づいたことをワークシートに書かせる活動を行った。

【手立て④出会いの演出】

意表をつく出会いとして四角で言葉を隠し、子どもに考えさせた。この活動を行うことで、子どもは意欲的に考えることができていた。四角の中には「思いやり算」という言葉が入る。この手立てをすることで、「思いやり算」という言葉を子どもに印象づけることができると考えた。

【手立て⑤終末の演出】

以下の写真を提示した。



AC ジャパンの広告である「思いやり算」では、子どもが日頃から行っている思いやりを再度確認し、意識的に思いやりを育めるよう授業を構成した。

「思いやり算」に出てくる「声をかける、分け合う」の写真を提示することで、もう一度自分自身の生活を振り返らせ、思いやりのある行動ができているかを考えさせた。

左の写真は、教師が給食の片づけをしている際に、教師に「ぼくがやります。」と声をかけている写真である。右の写真は、お代わりしている場面で、お互いに分け合う姿が伺える写真である。両写真とも思いやりのある写真であるため、子どもの心に響くと考える。

【成果】

ワークシートから以下の記述があり、学校外でも思いやりを行動に移すことができていることがわかる。

C11：おばあさんが落し物をしていたので、拾って渡した。

C12：小さい子が転んでけがをしていたら声をかけた。

C13：親に言われなくても進んでお手伝いをするようにしている。

以上のような記述が見られた。38名中26名の子どもがお手伝いについて記述をしていた。

この記述から「ブラッドレーの請求書」の内容である家族への思いやりや「同じ仲間だから」の内容である友達への思いやりの内容が確認できる。

また、アンケート調査「4年生行った道徳の中で一番印象に残る道徳はどのような道徳か。」では、38名中30名が「思いやり算」が心に残ったと回答している。「思いやり算」という言葉との出会いを演出したことによって、子どもに言葉の印象がつけられたことがわかる。

また、終末に提示した写真の効果により、給食のお

代わりの時間になると、子どもは、授業前にはなかった「〇〇がほしい人来てください。お代わりしたい人が〇人いるから〇人分に分けよう。」といった言葉かけが出てくるようになった。

【課題】

意欲を高める発問

「この4つの中の写真をみて、気づくことは何ですか。」

導入時に行った、この発問で、算数記号のみ記入している子どもが8名ほどいた。そこで、深く考えることが終わってしまうため、教師から「2つ以上気づいたこと書く」指示をすることで、子どもがこの広告についてたくさん見つけようとする意欲が高まったと考える。

3 教師力向上実習Ⅲ

(1) 担当学級6年2組

子ども数：男子17名／女子15名／計32名

子どもの実態

本学級の子どもは、学習面において、友だち同士で学び合う姿勢が見られ、友だちを助けようとする子どもが多い。生活面では、休み時間になると、男女隔てなく遊ぶ姿が見られる。一方で、自我を抑えきれず、相手に迷惑をかける子どもや善悪の判断ができていないが、友だちを傷つける言動が見受けられる。

以上の実態から実習Ⅱで実践した思いやりに関する道徳の授業を行い、子どもに思いやりの心を育ませ、行動にできるように促していきたい。

(2) 授業実践(思いやり算)

本実践では、実習Ⅱで行った「思いやり算」の実践を行った。実習Ⅰ・実習Ⅱで授業実践を行った学校以外で実践することで、道徳の授業で思いやりの心が育むことができるかを検証する。

素材：AC ジャパン広告「思いやり算」

ねらい：思いやりのある場面を考えさせたうえで、日常生活を振り返り、相手を思いやる言動を高める。

【手立て②多様な教材】

本実践では、AC ジャパン広告「思いやり算」を取り扱い、授業実践を行った。

【手立て③考えさせる授業】

本実践においては、実習Ⅱと同様に、広告の一部分を提示し、子どもに考えさせた。また、実習Ⅱの課題を踏まえ、ワークシートに4つの資料から気づくことを3つ以上書かせることを行う。この明確な発問をすることで、子どもはこの広告について考えることができる。

【手だて④出会いの演出】

広告の一部分を考えさせた後に、残りの広告部分を提示した。「思いやり算」と書かれている広告の文章を隠し、この部分には何が入るかを考えさせた。その後、「思いやり算」の言葉を提示した。子どもは、出会いによって思いやりについての考えが深まると考える。

【手だて⑤終末の演出】



左の写真は、休み時間の際に撮影した写真である。ある子どもがなにも言わず、スリッパを並べる姿を目にした。また、右の写真は、トイレで撮影した写真である。友だち同士で「掃除しよう」と声をかける場面があったため、授業の終末に提示した。以上の子どもの姿を授業の終末に子どもに考えさせる。

【成果】

以下のワークシートの感想から思いやりの心を育み、道徳の授業から行動する意欲をもたせることができた。

C14：今日の道徳の思いやり算を知って、私は、「助け合う。引き受ける。声をかける。分け合う。」のどれか一つを一日一回はしたいと思いました。

C15：思いやり算は、自分もいい気持ちになるし、やってもらった相手の人も嬉しくなる。とても嬉しい算数だということがわかりました。私もこれから算数は苦手でも、思いやり算という人としての算数を得意にしたいです。

C14が述べているように、一日一回という思いやりに対しての行動する意欲や目標をもつことができたことがわかる。

また、本実践の後に子どもの観察を行ったところ、実践に取り扱ったスリッパの並べている子どもの姿を提示したように、子どもが自らトイレのスリッパを並べる様子を見ることができた。

以上の点から一部の子どもには、思いやりの心を育み、行動に移すことができたのではないかと考える。

【課題】

教育活動全体で子どもの行動を観察する。

本実践では、写真を提示し、行動する子どもを観察することができたが、掃除活動を行っている子どもの姿の写真が多く、清掃活動に偏った実践になってしまった。また、写真を提示する素材は、対人に関係ない

写真や対物に関係する写真ばかりのため、教材に合わない写真を提示してしまい子どもの行動意欲を育むことができないと感じた。終末では、多様な思いやりの場面の写真を提示する必要があると学んだ。道徳実践が高まらない子どもが見られた。

C16：思いやり算は、大事だなと思った。

C16の記述から、思いやり算が大切であることが理解できたものの行動意欲をもつまでには、至らなかった子どもも見受けられた。1人でも多くの子どもが道徳的实践を高めることができるように、さらに授業の工夫をする必要があると感じた。

IV 成果と課題

1 成果

学校環境適応感尺度「アセス」より

下図は、学校環境適応感尺度「アセス」の結果である。教師力向上実習Ⅰの事前に一回目、教師力向上実習Ⅰ後に二回目、教師力向上実習Ⅱ後に三回目と調査を行った。結果としては、下図に見られるように、友人サポートが54から58に変化している。また、向社会的スキルが53から54へと変化していることがわかる。以上を踏まると、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱの実践から友だちへの思いやりの心が育めた一つの要因ではないかと考える。

適応次元	第1回	第2回	第3回
	実習Ⅰ事前	実習Ⅰ事後	実習Ⅱ事後
友人サポート	54	55	58
向社会的スキル	(53)	53	(54)

授業と学級活動の相乗効果

アンケート項目
「思いやりの木から日常生活で何か変わったことはありますか。」

上記の記述アンケートより以下の記述がみられた。

⑤思いやりの木から日常生活で、何か変わったことはありますか？
学校のみならず、外の人の思いやりも見つけるようになった。

上記の記述ではクラス内の思いやりではなく、学校全体や学校以外でも思いやりを見つけるようになったと記述されているため、「思いやりの木」を実践することで子どもが思いやりの意識が深まったのではないかと考えることができる。

⑤思いやりの木から日常生活で、何か変わったことはありますか？
おとうと、おねえちゃんのいいところをみつけるように、おねえちゃんとおとうと、とのけんかはあまりなくばってました。

上記の子どもは、学校で思いやりを見つけることで、

家庭でも思いやりを見つけることができるようになった。その結果、兄弟喧嘩が減少したことがわかる。学校から家庭へ思いやりの意識を方向づけることができたのではないだろうか。また、この子どもに関しては、積極的に思いやりの葉を記述する姿をみうけた。積極的に「思いやりの木」に参加することで、思いやりの心を育むことができたのではないだろうか。

以上の記述から道徳の授業と日常的な活動が横断し、子どもに思いやりについての考える効果を促すことができたのではないかと考えられる。

明確な発問で思考を促す

資料提示と明確な発問を実習Ⅰと実習Ⅱで取り扱った実践と取り扱わなかった実践を比較してみた。2つ実践を比較すると、資料提示をした実践の方が、意見が飛び交う様子を伺うことができる。また、明確な発問を行うことでワークシート



に全く文字を書かない子どもがいなくなることがわかる。以上のことを踏まえると、導入時に資料提示をすることで、道徳への意欲づけを確認することができる。また、明確な発問により、子どもの考えを明確にするとともに、考える活動をより活発にすることが上記のワークシートの記述からも理解できる。

この子どものワークシートを見ると、○か×で自分の意見を明確にすることで、自分の考えをもって、記述していることがわかる。しかし、○か×で示していない発問では、白紙の状態である。どう答えたらいいかわからないからである。この時の発問は、「思いと思いやりの違いはなんですか。」である。○か×かを示す明確な発問の有効性を実感した。

以上のことから、明確な発問により考えさせることで、子どもが内容について考えることができる。

子どもの姿を提示した効果

実習Ⅱでは、思いやりのある子どもの姿を提示することで、子どもは思いやりの心を育むことができた。授業中に、子どもが思いやりのある行動を再確認し、自分もやろうという記述がワークシートに書かれていた。



C24 ぐちゃぐちゃのごみを捨てる。適当に置いてあるほうきを片付ける。

上記の記述は、「気持ちをカタチに」の子どものワークシートの一部である。この記述から、右の写真のような行動をしたいということが再確認でき、また行動したいという意欲づけになったと考えられる。このような写真の提示により、子どもが日常生活で思いやりの心を持ち、考えて生活できるようになると考えられる。

2 課題

日常的な活動を意欲的に取り組ませる

実習Ⅰでは、「思いやりの木」の実践で、他者理解のために友だち同士の思いやりを見つけさせた。実習一週目は、日直の仕事として開始したため、意欲的に活動することができなかった。



先述のように、「思いやりの木」を始める前に、右の写真のような意欲づけを行った。この意欲づけに関しては、子どもの表情や言葉から意欲的に取り組もうとする姿がみられた。この後、日々の学校生活で教師から「思いやりはあるかな」などの声かけをすることで、より思いやりを見つける意欲づけになったのではないかと考える。教壇に立った際には、日常的な活動を行うことに関しても、子どもに教育活動を意識させる声かけをしていきたい。その支援によって、より意味ある教育活動になると考える。

よりよい道徳の授業づくりを目指す

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと3回の実習の中で多様な教材を活用した道徳実践を計7回実践させていただいた。道徳の授業を子どもの実態と照らせ合わせて、構成することは非常に困難であった。しかし、教師が子どもの成長を考え、教材開発することで、子どもの変容が行動として見られるようになったと感じた。私自身の教材開発力が未熟なため、本実習の道徳授業をつくる際に、多大な時間を割いてしまった。それを踏まえ、日頃から道徳の授業づくりを意識し、教材開発を行い、教材開発力を身に付けていきたい。

学級経営で道徳の授業を活かす

実習Ⅱでは、多様な教材を活用した授業を主に実践をさせていただいた。その実践で取り扱った資料を教室掲示し、子どもの目に触れるような形をとった。実習中は、子どもが道徳で取り扱った資料を目にする姿を観察することができたが、実習後の3か月経った現在では、掲示されているのみになっている。そのこと

を踏まえると、授業で取り扱った道徳の内容を持続させる活動をしていかなければ、子どもの心に残らない。朝の会や帰りの会、掃除の時間や給食時間、各教科の授業など道徳で行った内容を想起させることも大切なことである。また、学級で何か問題が起きた時にも、関連付けることで、より思いやりが深まる指導になると考える。

【引用・参考文献】

- ・愛知県教育振興会『明るい心』2015
- ・押谷由夫、立石喜男『思いやりの心を育てる』明治図書、1991
- ・佐藤幸司『道徳の授業は自分でつくる』日本標準、2009
- ・佐藤幸司『道徳の授業成功の極意』明治図書2014
- ・佐藤幸治『道徳・指導と教育の今日的課題』八千代出版、1999
- ・鈴木健二『道徳の授業づくり上達の10の技法』日本標準、2008
- ・鈴木健二『必ず成功する新展開の道徳の授業』日本標準、2014
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』東洋出版社、2008
- ・文部科学省『私たちの道徳』、2014

【付記】

最後に1年半のサポーター活動及び実習をさせていただく中で、連携協力校の校長先生を始め、管理職の先生方や指導教諭、教職員の皆様には温かくご指導・ご助言をいただいたこと深く感謝申し上げます。そして、多岐にわたるご指導・ご助言をしていただきました鈴木健二先生、多様なフィールド実習でご指導いただきました中山弘之先生、教師力向上実習Ⅲでご指導いただきました瀧田健司先生を始めとした、ご指導・ご助言をいただきました教職大学院の全ての先生方に厚くお礼を申し上げます。